

BCCWJ 中的和語自他兩用動詞的用法調查

王淑琴

政治大學日本語文學系教授

摘 要

先前研究對於和語自他兩用動詞的種類及其用法有詳細的記述，但這些記述與實際的使用狀況之間的關聯性不明確。本稿調查 BCCWJ 中的和語自他兩用動詞的用法及其使用傾向，具體的研究目的有以下兩項。

(a) 自動詞用法，抑或是他動詞用法較為多見？其理由為何？

(b) 自他動詞用法較為多見的用法各有哪些？其理由為何？

關於(a)，由本次調查結果可以得知，和語自他兩用動詞的他動詞用法較自動詞用法多見，這是因為他動詞用法中包含了慣用句化的表現及反身用法，特別是慣用句化的表現在 BCCWJ 中出現的比例相當高。關於(b)，他動詞用法較為多見的用法多出現在非典型的他動詞句中，但相對於此，自動詞用法較為多見的用法則出現在表自然現象或生理現象等典型的自動詞句中。由於日語的他動詞句亦能夠表示由自動詞句所表示的事態，因此，我們可以說日語的和語自他兩用動詞之所以同時具有自他動詞用法，是由原本能以自動詞句表示的事態由他動詞句來表示所引起的。

關鍵詞：和語、自他兩用動詞、BCCWJ、慣用句化、反身用法

A Survey of Yamato Verbs with Transitive and Intransitive Usage of BCCWJ

Wang, Shu-chin

Professor, Department of Japanese, Chengchi University

Abstract

Although there are detailed descriptions of yamato verbs with transitive and intransitive usage in Japanese, we do not know the relationship between these descriptions and actual usage. The purpose of this paper is to investigate yamato verbs with transitive and intransitive usage of BCCWJ, and to clarify the usage tendency of those verbs. Specifically, it aims to clarify the followings. (a) Is the transitive usage or the intransitive usage more common, and why? (b) What kind of usage is more often seen in the transitive(intransitive) usages, and why?

As for (a), it is clear that transitive usage appears more frequently than intransitive usage, because transitive usage includes many untypical transitive constructions, such as idiomatic expression or reflexive usage. In particular, a high percentage of idiomatic expression appears in BCCWJ. Regarding (b), usages that transitive usage is dominant are untypical transitive constructions, while usages that intransitive usage is dominant denote natural and physiological phenomena, i.e., typically expressed by intransitive construction. The phenomenon of yamato verbs with transitive and intransitive usage in Japanese can be considered to come from the fact that events may be expressed by intransitive construction are expressed by transitive construction.

Keywords: yamato word, verbs with transitive and intransitive usage, BCCWJ, idiomaticalized, reflexive usage

BCCWJにおける和語の自他両用動詞の用法調査

王淑琴

政治大学日本語文学系教授

要 旨

和語の自他両用動詞について、自他両用動詞の種類やその用法に対する詳細な記述があるものの、それらの記述と実際の使用状況との間の関連が分からない。本稿は、BCCWJにおける全資料を対象に和語の自他両用動詞の用法を調査し、その使用傾向を明らかにするのが目的である。具体的に以下のことを解明することである。

- (a)自他動詞用法のどちらが多く見られるか、その理由は何か。
- (b)自動詞用法、他動詞用法が多く見られるものにはそれぞれどのようなものがあるか、その理由は何か。

(a)について、他動詞用法が自動詞用法より多く現れることが明らかとなり、これは、他動詞用法に慣用句化したものや再帰的構文のような非典型的な他動詞文で表されるものが多くあるからである。特に慣用句化したものが高い割合でBCCWJに出現している。(b)について、他動詞用法が優位な用法は、非典型的な他動詞文に多く現れるのに対し、自動詞用法が優位な用法は、自然現象や生理現象を表す場合、つまり、典型的に自動詞文に集中している。日本語の他動詞構文は自動詞構文で表しうる事態と結びつくことがあるので、和語動詞の自他両用という現象は、自動詞構文で表しうる事態が他動詞構文によって表されることから来るものであると考えられる。

キーワード：和語、自他両用動詞、BCCWJ、慣用句化、再帰的

BCCWJにおける和語の自他両用動詞の用法調査

王淑琴

政治大学日本語文学系教授

1. 研究目的

和語動詞の中に(1)の「増す」のような自動詞としても他動詞としても使える「自他両用動詞」¹がある。

(1) a.(川が)水かさを増す。

b.(川の)水かさが増す。 (森田 2000: 66)

和語の自他両用動詞について、森田(1987、1994、2000)、須賀(1993、2000)、王(2015、2020)などの先行研究がある。これらの先行研究は和語の自他両用動詞やその構文的な対応関係についての記述があるものの、それらの記述と実際の使用状況との間の関連が分からない。本稿は国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)における和語の自他両用動詞の用法を調査し、以下の(a)(b)を解明することを目的とする。

(a)自他動詞用法のどちらが多く見られるか、その理由は何か。

(b)自動詞用法、他動詞用法が多く見られるものにはそれぞれの

¹ 森田(2000)は「自他両用動詞」と「自他同形動詞」を区別しており、「同じ語形が意味面で自他間に共通性を持ち、文法面でも格に立つ名詞語彙に異同がない場合を指す」(p.63)ものを「自他両用動詞」と呼び、同じ語形を取って別々に機能しているものを「自他同形動詞」と定義している。例えば、(i)の「増す」は「自他両用動詞」であるが、(ii)の「負う」は他動詞のヲ格名詞が自動詞のガ格名詞とは違い「自他同形動詞」である。

(i) a.(川が)水かさを増す。

b.(川の)水かさが増す。

(ii) a. 責任を負う。(cf.*責任が負う)

b. 世人の努力に負う。

(森田 2000: 66,69)

「自他同形動詞」は、他動詞文のヲ格名詞と自動詞文のガ格名詞が同じではなく、「自他対応」の定義(佐藤 2005: 169-171 参照)を満たしていない。森田(2000)は「自他同形動詞」を『多義語の文法的寄り合い所帯』とでも言うべき性格の語彙である」(p.63)と指摘している。つまり、上記の(ii)は同じ語の多義的用法とも考えられるので、本稿は「自他同形動詞」を研究対象としない。

ようなものがあるか、その理由は何か。

2. 先行研究の記述

和語の自他両用動詞の用法を考察したものには、森田(1987、1994、2000)、須賀(1993、2000)、王(2015、2020)がある。まず、これらの先行研究における記述を概観する。

森田の一連の研究は、動詞の目的語(主語)や格などによって自他両用動詞を類型化し、和語の自他両用動詞に対する包括的な研究と言える。森田(1994)は自他両用動詞の意味パターンを以下のように整理している。

①自他両文型が同じ表現的意味のグループ...「つまり」の関係 子供を授かった／子供が授かった

②同じ表現的意味で、助詞のゆれと見るグループ...「つまり」の関係 私は世を背いた／私は世に背いた

③他動現象の結果が自動現象と同じと見るグループ...「だから」の関係 自動車が泥をはねた／泥がはねた

④他動行為の結果として自動現象が生ずると見るグループ...「だから」の関係 敵が軍勢を繰り出した／敵の軍勢が繰り出した

⑤自他両文型で動作主・現象主が入れ替わるグループ...逆方向の行為や現象 父親が息子を怒鳴る／息子が怒鳴る

⑥両文型の使い分けが、対他者と自身の行為との差であるグループ...無関係の行為 家来が馬を控えて待つ／家来が後ろに控えて待つ

⑦自他の動作主が有情者・非情物の差であるグループ...無関係の事柄 不良少年が悪事を働く／知恵が働く

⑧自他で語彙的意味が異なるグループ...無関係の事柄 値段を負ける／敵に負ける

(森田 1994: 250-251)

森田(2000)はさらに「自他両用動詞」と「自他同形動詞」を区別し、上記(1)のような自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同じという

用法を持つ動詞のみ「自他両用動詞」と定義している。このような動詞には「繰り出す、垂れる、着く、閉じる、伴う、馳せる、はだける、吹き上げる、増す、間違ふ」があるとしている。これに対し、一部の用法が自他両用という動詞もあり、例えば、「巻く」のように、「渦を巻く／渦が巻く」の場合は自他両用が成立するが「包帯を巻く／*包帯が巻く」の場合は自他両用が成立しない。森田(2000)はこのような動詞を「自他同形動詞」と呼んでおり、「運ぶ、跳ねる、張り出す、張る、開く、巻く、結ぶ、催す、盛り返す」を挙げている。

須賀(1993、2000)は森田(1994)が指摘した自他両用動詞の一部を考察し、その意味の違いを指摘している。例えば、須賀(1993)では自他同形動詞「増す、巻く、はねる、運ぶ、開く、閉じる、張る、伴う、催す、はだける、触れる」の自他用法を考察し、「自他同形の動詞が成立するのは、他動詞文の主体の動きと客体の動き、すなわち自動詞文の主体の動きとが、別の動きではなく、同一の動きの中に捉えられる場合に限られている」(須賀 1993: 335)と結論付けている。例えば、(2)では「列車」が「速度」の変化を引き起こせば、「列車」自身の変化になり、「列車」が「速度」に関して引き起こすその動きそのものが、「速度」の変化であると説明している。

(2)列車はしだいに速度を増し、その心地よい振動が眠りをさそった。
(須賀 1993: 323)

須賀(1993)の記述に対し、王(2015、2020)は、(3)のような他動詞文の主体の動きと客体の動きが同一ではない自他両用の用法もあると指摘している。

(3)彼はドアを開いた／ドアが開いた
(王 2015: 73)

また、王(2015、2020)は格名詞の意味カテゴリーによって自他両用動詞を四つの類型に分類し、その用法を考察している。つまり、格名詞が「身体部分や身体属性」、「自然物」、「人工物」、「抽象名詞」を表す場合、それぞれどのような自他動詞構文であるかを考察し、和語の自他両用動詞の自他用法を記述している。

このように、和語の自他両用動詞に対する先行研究は、自他両用

airiti

動詞の種類やその用法に対して詳細な記述があるものの、それらの記述と実際の使用状況との間の関連が分からない。本稿は、BCCWJにおける全資料を対象に和語の自他両用動詞の用法を調査し、その使用実態、つまり、上記の(a)(b)を明らかにするのが目的である。

3. 資料収集とデータ処理

本稿は、まず、BCCWJの全データを検索対象にして、上記の先行研究で指摘された自他両用動詞が含まれる用例を「中納言アプリケーション」の「語彙素検索」で抽出した。王(2015、2020)では和語の自他両用動詞の格名詞についての記述があるので、それを参考にし、Excelを用いて「自他両用」の定義にあった(つまり、自動詞文のガ格名詞と他動詞文のヲ格名詞が同一である)用例にタグをつけた。タグ付けは下記の①～⑤の原則に基づく。

①格名詞の下位分類を表すものもまとめて集計する。例えば、「水が噴き出す」の場合、「水／噴水／湧水／伏流水／鉄砲水 が噴き出す」の用例も集計する。また、例えば、「～水」の造語ではないが、「水分」は「水」の意味を表すので、次の例も「水が噴き上げる」の用例として集計する(以下の用例は出典が明記されないものはすべて BCCWJ から取ったものである。下線は筆者によるものである)。

(4)急激に高くなった地中の水圧のかっこうな逃げ場が実は地上なので、水分が回りの砂を巻き込んで地上に噴き上げてくることをこう言います。」

②格名詞と動詞の複合語、例えば、次の例における「手つかず」は、自他の判別ができないので集計しない。

(5)つまり、戦争中そのままの精神がそこに手つかずで生きのびていて、自民党のタカ派文教族とつながって歴史の反動的改竄を推し進めてきたのではないかということである。

③動詞に複数の意味がある場合、自他動詞用法の意味が同一である用例のみ集計する。例えば、「手(が／を)つく」が自他両用が見ら

れるのは「手(が／を)床につく」のような「つく」が「ある場所に接触する」の意味を表す場合なので、その意味を表す用例のみ自他両用の用例と認める。次の「手がつく」における「つく」は「付属する、付着する」の意味を表すので、自他両用の用例として集計しない。

(6)両手鍋両側に手がついているので、鍋返ししやすい形です。

(7)材料に衣を付ける時は箸ではなく手の方がまんべんなく付きます。

④俳句で使われる表現は格助詞が示されておらず自他の判別ができないので、用例として集計しない。

(8)日の匂して水上の虎落笛傲霜や墓は手触るるために在り

(9)端居して後手つけば山青し虫籠の美しからぬ昼間かな

(10)病める眼に真昼川岸風巻いて

⑤格助詞、格名詞の省略、とりたて助詞にとってかわられた助詞を次の原則に基づいて処理を行い、下記の原則でも処理できないものを用例として集計しない。

⑤-①動詞と共起する文型や使われる構文

例えば、(11)(12)は「閉じる」が「～ておく」「～てから」の文型で使われ、「ファイルを閉じておく」「ページを閉じてから」という意味を表すと考えられるので他動詞用法とする。

(11)プレビューして確認したら、メニューバーの[ファイル→別名で保存]を選択し、“z o o m 1 . l i v”として保存し、ファイルは閉じておきます。

(12)画面上のツール→ インターネットオプション → 履歴のクリア → OK そして元の画面に戻ったら、更新するか、一度閉じてからまた開くと消えています。

⑤-②動詞文と共起する前後の文

(13)は自動詞表現「消えていく」から「痛みも」における「も」はもともとガ格であることが分かり、「痛みが伴う」という自動詞表現とする。また、(14)は「閉じて指導する」における「テ形」が継起の

意味を表し、つまり、「学校側が校門を閉じて生徒を指導する」という意味を表すので、他動詞用法(「校門を閉じる」)とする。(15)は「閉じる」の格名詞が直前に現れていないが、前文から「ウィンドウを閉じる」であることが分かり、他動詞用法とする。また、(16)は前文に条件節が来ており、文全体が「その状況のもとで、ある結果状態が生じる」という意味を表すので、後文が自動詞表現である(つまり、「仕事がスムーズに運ばない」)と考えられる。

(13)自分で行うには、第十二肋骨(R十二)にそって母指を内側に絞り、胃倉または痞根(奇穴)を固定し、自分の殿部を捻るようにゆすぶると、次第に指が中に入って行き痛みもそれにともなって消えていく。

(14)高塚高校では、遅刻者にはグラウンドを走るペナルティがあり、遅刻者とそうでない者を区別するために、生徒指導内規において「校門は八時三十分の予鈴の鳴り始めで閉じて指導する」とされていた。

(15)2アプリケーションウィンドウ制御ボタン#ウィンドウの大きさを変えたり、閉じたりします。

(16)だから、まずこのヨコの関係をつくらなくては仕事はけっしてスムズに運ばない。

⑤-③動作主の存在や文脈の話題

(17)はドアが閉まっているという状態を引き起こす動作主が不明なので、「ドアは閉じていた」は自動詞用法(ドアが閉じていた)と考えられる。また、(18)は文脈から「手エついて」の主語が話し手であることが分かり、他動詞用法とする。

(17)スタイナー夫人からの贈り物かもしれない。バドはバスルームを覗いた。ドアは閉じていた。

(18)「叱られるよ、きっと」「ちゃんとあやまるさ。 手エついて」「車で来たこともバレちゃうよ」

なお、BCCWJでは「ヒラク」と解析されるものが実際「アク」の誤解析と考えられる用例(次例参照)が多数あるので、今回の調査で

は「開く(ヒラク)」を外した。²

(19)気持ちは盛り上がっても、普通なら旅の相談をするのは翌日の朝、旅行代理店が開くまで待たなければなりません。

(20)あんまりお店が開いてなくて、コンビニで弁当買って民宿の部屋で食べたような気がする…。

上記の方法で処理した和語の自他両用動詞の用法(「N(を／が)V」を指す、ただし、「開く」の用法が含まれていない)の数は 105 個、タグをつけた用例数が 7345 例である。なお、本稿における「用法」という用語は動詞と格名詞の組み合わせを指しており、先行研究で使われる「用法」という用語の指し示す範囲よりも狭いことを断っておきたい。105 個の和語の自他両用動詞のそれぞれの用法、例えば、「口(を／が)閉じる」について、コーパスでは「N(を／が)V」の自他動詞用法が同じ確率で現れると仮定し、フリーソフト js-STAR を用いて「直接確率計算」(田中・山際 1992 参照)という有意差分析を行った。

4. 調査結果

4.1 全体的な傾向から

105 個の用法のうち、自他動詞用法の用例数が同じであるものが 3 個ある。それを除いて、102 個の自他動詞用法の数を表 1 の左側にまとめた。表 1 を見ると、他動詞用法が自他動詞用法全体の 50%を超える用法が 67 個、自動詞用法が自他動詞用法全体の 50%を超える用法が 35 個ある。他動詞用法が優位な(ここでは、他動詞用法が自他動詞用法全体の 50%を超える意味を指す)用法が多いことが分かる。

有意差が見られる用法に絞ってみると、この傾向がさらに強くなる。「直接確率計算」の両側検定で非常に有意($p < .01$)、もしくは有意($p < .05$)の用法の数を表 1 の右側にまとめた。それを見ると、有意差

² 筆者が(19)(20)のような BCCWJ では「店が開(ひら)く」と解析される用例をネイティブに確認した結果、すべて「店が開(あ)く」の読み方となった。

airiti

検定で他動詞用法が有意に多い用法が 36 個、有意差検定で自動詞用法が有意に多い用法が 10 個あり、他動詞用法が優位な(ここでは、有意差検定で他動詞用法が有意に多い意味を指す) 用法の割合が高くなる。このように、BCCWJ における和語の自他両用動詞の用法について、他動詞用法が優位なものが大半を占めていることが分かる。

表 1 BCCWJ における和語の自他両用動詞の自他用法の数

	他(自)動詞用法が全体の 50%を超える用法	有意差検定で有意差が見られる用法
他動詞用法が優位な用法の数	67 個(65.7%)	36 個(78.3%)
自動詞用法が優位な用法の数	35 個(34.3%)	10 個(21.7%)
合計	102 個(100.0%)	46 個(100.0%)

用例数から見ても、和語の自他両用動詞は他動詞用法が大半を占めていることが分かる。表 2 に示されるように、7345 例のうち、他動詞用法が 5451 例、自動詞用法が 1894 例あり、他動詞用法が圧倒的に多いことが分かる。この傾向は、自他動詞用法に有意差が見られる用法にしぼってみるとより明確である。「直接確率計算」の両側検定で非常に有意($p < .01$)、もしくは有意($p < .05$)の用法に絞ってみると、他動詞用法の用例数の割合がさらに高くなる。

表 2 BCCWJ における和語の自他両用動詞の自他用法の用例数

	全体の自他用法の用例数	有意差が見られる自他用法の用例数
他動詞用法の用例数	5451(74.2%)	4584(80.9%)
自動詞用法の用例数	1894(25.8%)	1083(19.1%)
合計	7345(100.0%)	5667(100.0%)

以上で見たように、BCCWJにおける和語の自他両用動詞の用法の数から見ても、その用例数から見ても、他動詞用法が自動詞用法より多く使われることが分かる。この傾向は、有意差検定で非常に有意($p < .01$)、もしくは有意($p < .05$)の用法に絞ってみるとさらに明確に出る。次節では自他動詞用法が優位なものにはそれぞれどのようなものがあるかを述べ、他動詞用法が自動詞用法より多く使われる理由をさぐってみる。

4.2 他動詞用法が優位な用法

和語の自他両用動詞の105個の用法のうち、「直接確率計算」の両側検定で非常に有意($p < .01$)、もしくは有意($p < .05$)の用法が見られたのは、自他動詞用法を合わせて46個ある。そのうち、他動詞用法が有意に多いのは36個ある。36個の用法は次の三種類に分類できる。

(A)慣用句化したもの

「思いをはせる」「実を結ぶ」「舌を巻く」「渦を巻く」「幕を閉じる」
「胸を張る」「根を張る」

(B)再帰構文や拡張再帰構文であるもの

「目を閉じる」「口を閉じる」「手をつく」「手を触れる」「煙を噴き上げる」「尻尾を巻く」「肩を張る」「症状を伴う」「苦痛を伴う」「痛みを伴う」「変化を伴う」「～さを伴う」「～性を伴う」「リスクを伴う」「～感を伴う」「～力を伴う」「勢いを増す」「厚みを増す」「～数を増す」「輝きを増す」「～さを増す」「速度を増す」

(C)動作主他動詞文であるもの

「水を張る」「ファイルを閉じる」「窓を閉じる」「ページを閉じる」
「門を閉じる」「画面を閉じる」「ウィンドーを閉じる」

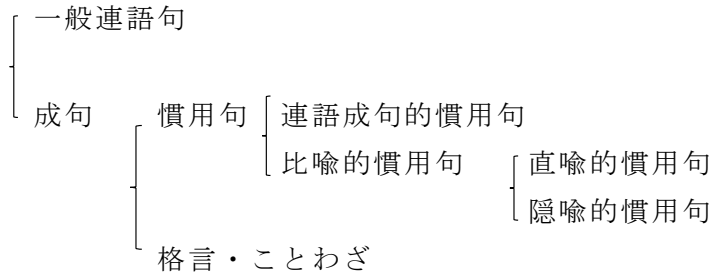
まず(A)の用法を見る。(A)用法を他動詞用法の用例数の割合の降順で表3にまとめる。格名詞が多数ある場合、例えば、「実／実り／果実 結ぶ」は、「実(など) 結ぶ」と略して表記する。

表3 (A)用法の用例数

格名詞	動詞	他動詞 用法の 用例数	他動詞 用法の 用例数 の割合	自動詞 用法の 用例数	自動詞 用法の 用例数 の割合	自他動 詞用法 の用例 数合計
実(など)	結ぶ	191	99.50%	1	0.50%	192
思い	はせる	239	99.20%	2	0.80%	241
舌	巻く	94	98.90%	1	1.10%	95
渦	巻く	126	96.90%	4	3.10%	130
幕	閉じる	119	96.70%	4	3.30%	123
胸	張る	443	92.70%	35	7.30%	478
根	張る	115	91.30%	11	8.70%	126
合計		1327	95.81%	58	4.19%	1385

(A)用法は「NをV」が慣用句になっているため、他動詞用法が圧倒的に多い(他動詞用法が9割以上)という特徴がある。慣用句について、宮地(1982)は「一般の連語句(語の連結体で句としてのまとまりを持つもの)よりも結合度が高いものだが、格言・ことわざと違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではない」(p.238)と定義し、慣用句を一般の連語句より結合度が高いだけの「連語成句的慣用句」と、比較的是っきりした比喩的意味を持つ「比喩的慣用句」に分類している。「連語成句的慣用句」は、例えば、「あがき」と言えば「あがきが取れない」、「雨つゆ」と言えば「雨つゆをしのぐ」がすぐ想起されるようなものを指す。一方、「比喩的慣用句」はさらに「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」に分けられ、前者は、例えば、「赤子の手をひねるよう」「親船に乗ったよう」のような「～(の)よう」「～(の)思い」などを伴った慣用句である。後者は、例えば、「肩を持つ」のような一般連語句として「肩」「持つ」の原義を持つものとして使

われうるが、慣用句として「見方する、一方に力を添える」などの意味も持つものであると指摘している。



宮地(1982: 238)

宮地(1982)の定義によると、「思いをはせる」は「連語成句的慣用句」であり、「実を結ぶ」「根を張る」「渦を巻く」「幕を閉じる」「胸を張る」「舌を巻く」は文字通りの意味と比喩的意味を両方持っており、「隱喩的慣用句」である。例えば、「実を結ぶ」「根を張る」「舌を巻く」は次の例が示すように、文字通りの意味((21)(23)(25))を持っているが、「実る」((22))、「定着する」((24))、「感心する」((26))という比喩的な意味も持っている。

- (21)めしべの先に花粉がつくことを、受粉といい、実ができるには、受粉することが必要である。このようにして、植物は、実を結んで中にたくさんの種子をつくり、生命を伝えていく。
- (22)この年になって努力が実を結ばず、何の才能も開花せず、先行き不透明じゃあ、もうダメだべな？
- (23)最大の障害は、山肌に土がないことだった。樹木が根を張ろうにも、土がないのである。
- (24)しかし、もしあのルークがミスター・ギャレットその人だとしたら！ その考えは頭の中にしっかりと根を張り、波紋のように円を描いて広がっていった。
- (25)中国人はハッキリ『アール』と発音している訳ではないのですが、舌を巻いて発音するので日本語の表記方法として『アル』を選択し、使い続け、現在に至る...って感じだと思います。
- (26)読めば読むほど、重松さんの文章のパワーに感心をし、表現

の巧さに舌を巻いた。

BCCWJ では(A)用法は比喩的な意味で使われる用例が多く現れるため、他動詞用法の用例数が圧倒的に多いのである。例えば、「舌を巻く」の場合、94 例中(25)のような「舌を巻く」という動作的意味を表す用例は 5 例のみあり、そのほかの 89 例がすべて(26)のような「感心する」という意味で使われるものである。宮地(1982)では、動詞慣用句の自他を調べ、「腰を抜かす」「腰が抜ける」のような自他対応を持つものが全体の 15%に過ぎず、自動詞形専用・他動詞形専用の方が圧倒的に多く、慣用句の固定度が高いことを指摘している。このように、(A)のような慣用句化したものは意味が定着しているため、その他動詞用法が圧倒的に多く使われるのである。これは、BCCWJ では和語の自他両用動詞の他動詞用法が多く見られる理由の一つである。

次に(B)の用法を見る。(B)用法を他動詞用法の用例数の割合の降順で表 4 にまとめる。格名詞が多数ある場合、例えば、「目／片目／両目／右目／左目 閉じる」は、「目(など) 閉じる」と略して表記する。

表 4 (B)用法の用例数

格名詞	動詞	他動詞 用法の 用例数	他動詞 用法の 用例数 の割合	自動詞 用法の 用例数	自動詞 用法の 用例数 の割合	自他動 詞用法 の用例 数合計
目(など)	閉じる	1238	98.00%	25	2.00%	1263
症状	伴う	37	94.90%	2	5.10%	39
口	閉じる	197	94.70%	11	5.30%	208
勢い	増す	57	93.40%	4	6.60%	61
変化	伴う	22	91.70%	2	8.30%	24
煙(など)	噴き上げる	22	88.00%	3	12.00%	25

苦痛	伴う	35	87.50%	5	12.50%	40
手(など)	つく	185	85.60%	31	14.40%	216
痛み	伴う	88	85.40%	15	14.60%	103
尾／尻尾	巻く	22	84.60%	4	15.40%	26
～さ	伴う	33	80.50%	8	19.50%	41
厚み	増す	20	80.00%	5	20.00%	25
～数	増す	62	78.50%	17	21.50%	79
輝き	増す	40	78.40%	11	21.60%	51
～性	伴う	30	76.90%	9	23.10%	39
～感	伴う	49	74.20%	17	25.80%	66
～さ	増す	453	73.10%	167	26.90%	620
(～)速度	増す	25	71.40%	10	28.60%	35
肩／肩肘	張る	39	70.90%	16	29.10%	55
リスク	伴う	29	69.00%	13	31.00%	42
手(など)	触れる	206	68.90%	93	31.10%	299
～力	伴う	35	68.60%	16	31.40%	51
合計		2924	85.80%	484	14.20%	3408

(B)用法は再帰構文や拡張再帰構文である。再帰構文について、仁田(1982: 80)は「再帰」を「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻って来ることによって、動作が完結するといった現象」と定義し、そのヲ格名詞は「身体部分」という意味特徴を帯びており((27)参照)、「気持ち、心」といった心理的なものも含まれると述べている。

(27)子どもは手を叩いて喜んだ。 (仁田 1982: 87)

仁田(1982)の定義によると、上記の(B)の用法のうち、「目を閉じる」「口を閉じる」「尻尾を巻く」「肩を張る」「手をつく」「手を触れる」³「症状を伴う」「苦痛を伴う」は再帰構文といえる。また、王(2017)

³ 「手をつく」「手を触れる」は次の例のように着点の「ニ格」を取るものであ

airiti

によれば「煙を噴き上げる」も再帰構文である。「噴き上げる」は(28)(29)が示すように、その主語が人間や人工物を表す名詞であるが、(29)の用法は(28)の擬人化用法（拡張用法）と考えられる。

(28)「ふうん」吉次は、煙草の煙を吹き上げた。

(29)神戸三宮の岸壁に横づけされている「ばいかる丸」は中央の煙突から青空にむけて黒煙をふきあげ、いまにも動きだしそうにみえた。

王(2017)は、再帰構文におけるヲ格名詞を角田(2009)の「所有傾斜」に基づいて規定し、ヲ格名詞がガ格名詞で表される動作主体の排せつ物や体に取り入れる／体から取り除くもの、例えば、「あせをかく」「咳をする」「ひげを剃る」「息／煙をはく」「息を吸い込む」の表現も再帰構文としている。本稿もそれに従い、「煙を噴き上げる」を再帰構文とする。

(B)用法は、ガ格名詞が人間ではなく、次の例が示すように抽象名詞を表すものもある。例えば、(30)では「身体症状を伴う」ということがガ格名詞「うつ状態」の一つの特徴であると言える。

(30)うつ状態とは、精神症状として、抑うつ気分、思考の制止、意欲の減退などが症候群として認められる状態をいう。それに睡眠障害、食欲減退、体重減少、性欲減退など多彩な身体症状を伴うことが特徴である。

(31)現在の経済構造は大きな変化を伴い、そして変化が急速である。

(32)そしてその直後にファシズムが勢いを増し、世界は第二次大戦へ向かって誰の目にも明らかな歩みを続けていきます。

王(2017)は(27)のようなガ格名詞が[+人間][+有生][+具象]という属性を持つものを典型的な再帰構文とし、(30)～(32)のようなガ格

るが、動作主から出た働きかけが動作主自身に戻ってくるので、仁田(1982)の定義を満たしていると考えられる。

(i) だが、貴子は目をきつく閉じ、壁に手をついていた。

(ii) 下向きの矢印がついたプレートに手を触れながら 冴子が確認する。

名詞が[－人間][－有生][－具象]という属性を持つものを拡張再帰構文の一種としており、その場合、ヲ格名詞がガ格名詞の一側面や一特徴(合わせて「属性」と呼んでいる)を表すとしている。例えば、(30)は身体症状を伴うのがうつ状態が現れる際の一つの徴候であり、ヲ格名詞「身体症状」がガ格名詞「うつ状態」の一つの特徴と言える。(31)(32)は経済構造(ガ格名詞)に変化(ヲ格名詞)というものがあること、ファシズム(ガ格名詞)に勢い(ヲ格名詞)というものがあることは人間の捉え方から来るものであり、ヲ格名詞がガ格名詞の一つの捉え方(側面)である。上のようなガ格名詞が抽象的概念を表す「～を伴う」「～を増す」の用法は、拡張再帰構文の一種と言える。再帰構文や拡張再帰構文は他動詞構文「XガYヲV」と同じ構造を持っている。これはBCCWJにおける和語の自他両用動詞は他動詞用法が多く現れるもう一つの理由である。

(A)用法のうち、「思いをはせる」「舌を巻く」「胸を張る」「実を結ぶ」「根を張る」は文字通りの意味で使われる場合、再帰構文や拡張再帰構文である。しかし、前述のようにそれらの用法はほとんど比喩的意味で使われているので、本稿は慣用句化したものに分類する。

最後に(C)の用法を見る。(C)用法を他動詞用法の用例数の割合の降順で表5にまとめる。格名詞が多数ある場合、例えば、「水／冷水／氷水 張る」は、「水(など) 張る」と略して表記する。

表5 (C)用法の用例数

格名詞	動詞	他動詞 用法の 用例数	他動詞 用法の 用例数 の割合	自動詞 用法の 用例数	自動詞 用法の 用例数 の割合	自他動 詞用法 の用例 数合計
水(など)	張る	108	99.10%	1	0.90%	109
ファイル	閉じる	22	95.70%	1	4.30%	23
窓	閉じる	13	92.90%	1	7.10%	14

ページ	閉じる	15	88.20%	2	11.80%	17
門(など)	閉じる	22	81.50%	5	18.50%	27
画面	閉じる	20	76.90%	6	23.10%	26
ウィンドー	閉じる	35	76.10%	11	23.90%	46
合計		235	89.69%	27	10.31%	262

(C)用法は、(33)(34)が示すように、有情物が無情物に働きかける典型的な他動詞文である。井上(1995)は、このような「動作主他動詞文」は、「意図的動作」と「被動者の変化」という意味特徴を持ち、典型的な他動詞文であるとしている。(C)用法はほとんど「閉じる」の用法である。

(33)一とおり作業が終ったところで、庄司さんがオケに水を張って持ってきた。

(34)その場合は「OK」をクリックして、開いているファイルを閉じてから削除してください。

(C)用法は典型的な他動詞文であるのに対し、(A)(B)用法は非典型的な他動詞文である。(A)用法は形式と意味の定着化を伴うものであるが、再帰構文や拡張再帰構文として使われる、或いは「NをV」が自動詞表現に相当する概念を表すことで、典型的な他動詞文が持つ「意図的動作」「被動者の変化」という特徴を失う。「(人間が)思いをはせる」及び「(人間が)舌を巻く」「(人間が)胸を張る」「(植物が)実を結ぶ」「(植物が)根を張る」が文字通りの意味で使われるものは、再帰構文や拡張再帰構文であると考えられる。仁田(1982)で指摘されているように、再帰構文は他動詞文で表されるが、「他者への働きかけ」といった意味的特徴をもたないため、自動詞に近づいている。つまり、再帰構文で使われる「思いをはせる」「舌を巻く」「胸を張る」は典型的な他動詞文が持つ「被動者の変化」という特徴を持っていない。拡張再帰構文で使われる「実を結ぶ」「根を張る」は、そのガ格名詞が無生物名詞であり、「意図的動作」の特徴も持っておらず両方の特徴を欠いている。

一方、「NをV」が比喩的に使われる場合は、自動詞表現に相当する概念を表す。(22)(24)(26)で見たように、「実を結ぶ」は「実る」、「根を張る」は「定着する」、「舌を巻く」は「感心する」の意味を表す。また、(35)(36)が示すように、「幕を閉じる」は「終わる」、「胸を張る」は「自信を持っている様子だ、自信満々だ」の意味を表し、いずれも自動詞表現に相当するものである。「渦を巻く」は(37)が示すように、「渦巻きの形をしている」という意味を表し、物事の外的特徴を述べており動作性を持っていない。⁴比喩的に使われる「NをV」は自動詞表現に相当する概念を表すため、典型的な他動詞文が持つ「意図的動作」「被動者の変化」という特徴の一方、或いは両方を欠いている。例えば、(36)の「海賊が胸を張る」、(37)の「糸ミミズが渦を巻いている」という他動詞文は「被動者の変化」の特徴を持っておらず、(35)の「第二次世界大戦が幕を閉じる」という他動詞文は「意図的動作」「被動者の変化」の両方の特徴を欠いている。

(35) 第二次世界大戦が日本の敗北によって幕を閉じて十年ほどたった頃、小説家加賀美正一は何人かと一緒にダンスホール「フロリダ」へ行った。

(36) 「おれさまは、七つの海をまたにかける海賊トラヒゲだ」海賊は、胸をはりました。

(37) 糸ミミズが渦をまいていた。

(B)用法について、(A)用法と同様に、再帰構文は典型的な他動詞文が持つ「被動者の変化」という特徴を持っておらず、拡張再帰構文は、「意図的動作」「被動者の変化」の両方の特徴を欠いている。例えば、(28)の再帰構文は他者への働きかけがないため、「被動者の変化」という特徴を持っていない。また、(29)(30)(31)(32)の拡張再帰構文は、主格名詞が無生物名詞であり、「意図的動作」という特徴も

⁴ 次のように「渦を巻く」の主語が抽象的な概念を表す名詞の用例もあるが、その場合は、「渦を巻くようだ」という意味を表す。このような用例では、「渦を巻く」が抽象的に、比喩的に使われ、動作性を持っていないと考えられる。

(i)卑屈が板についた表情だったが、こちらのうしろめたさにつけ込んでいるという疑念も拭えず、出口のない忿懣が烏丸の中で渦を巻いた。

持っておらず、つまり、両方の特徴を欠いている。

以上で見たように、(A)(B)の用法は、「被動者の変化」、或いは「意図的動作」「被動者の変化」の両方の特徴を欠き、非典型的な他動詞文である。つまり、和語の自他両用動詞の他動詞用法が優位なものは、非典型的な他動詞文が多く、典型的な他動詞文が少ないということが言える。4.1 で見たように、和語の自他両用動詞の全体的な用法について、他動詞用法が自動詞用法より多く見られた。その理由は、その他動詞用法には(A)(B)のような非典型的な他動詞文が多くあるからであると考えられる。特に、(A)の慣用句化した用法は、意味と形式の定着化を伴うため、他動詞用法が 9 割以上を占めている。このように、非典型的な他動詞文が多く現れるため、和語の自他両用動詞は他動詞用法が多く見られたのである。

4.3 自動詞用法が優位な用法

和語の自他両用動詞の 105 個の用法のうち、「直接確率計算」の両側検定で非常に有意($p < .01$)、もしくは有意($p < .05$)の用法が 46 個あるが、そのうち、自動詞用法が有意に多いのは 10 個ある。10 個の用法は次の三種類に分類できる。自動詞用法の用例数の割合の降順で表 6 にまとめる。格名詞が多数ある場合、例えば、「こと／事／万事 運ぶ」は、「こと(など) 運ぶ」と略して表記する。

(D)自然現象を表すもの

「風が吹き込む」「水が噴き出す」「風が噴き出す」「風が吹きつける」

(E)生理現象を表すもの

「汗が噴き出す」「血が噴き出す」「～感が増す⁵」「痛みが増す」「お腹が張る」

(F)自然に起きる事態

「ことが運ぶ」

⁵ 「～感が増す」の用法の中に「存在感が増す」のような(E)生理現象を表すものとは言えないものがある。「～感が増す」のさらなる詳細な分類が必要と思われるが、今後の課題としたい。

(i)中高年 若い世代が主役と思いがちなレンタルビデオ店で中高年の存在感が増している。

表 6 自動詞用法が優位な用法の用例数

格名詞	動詞	他動詞 用法の 用例数	他動詞 用法の 割合	自動詞 用法の 用例数	自動詞 用法の 割合	自他動 詞用法 の用例 数合計
風(など)	吹き付ける	1	1.3%	75	98.7%	76
汗(など)	噴き出す	3	3.5%	83	96.5%	86
腹(など)	張る	3	3.8%	75	96.2%	78
痛み	増す	3	14.3%	18	85.7%	21
風(など)	噴き出す	5	18.5%	22	81.5%	27
水(など)	噴き出す	7	20.6%	27	79.4%	34
血(など)	噴き出す	18	22.8%	61	77.2%	79
風(など)	吹き込む	30	23.6%	97	76.4%	127
～感	増す	28	33.3%	56	66.7%	84
こと(など)	運ぶ	63	37.3%	106	62.7%	169
合計		161	20.6%	620	79.4%	781

表 6 から、他動詞用法が優位なものとは比べて、自動詞用法が優位なものは用法の数が少なく、自動詞用法の用例数も少なく、100 例を超えるのは「ことが運ぶ」のみであることが分かる。また、前項動詞が「吹く（噴く）」の複合動詞が多く占めている。特に(D)自然現象を表すものは、すべて前項動詞が「吹く（噴く）」の複合動詞であるのが特徴的である。

(D) (E)は意志でコントロールできなく、日本語で自動詞文で表すのが一般的である。これに対し、(F)は事態の結果に焦点を当てる用法であり、意志でコントロールできるかに関しては中立的である。⁶(F)の「ことが運ぶ」は格名詞が抽象概念を表し、抽象的な事態を表

⁶ (F)自然に起きる事態と(D)自然現象を表すものの違いについて、(D)自然現象を表すものは意志でコントロールできないが、(F)自然に起きる事態は焦点が結

している。このような抽象化用法は、今回の調査結果の有意差検定で他動詞用法と有意差が見られたのは「ことが運ぶ」のみである。自動詞用法の用例数が他動詞用法の用例数を超えるもの(例えば、「行動が伴う」「歴史が閉じる」)は、今回の調査結果でいくつか見られたが、いずれも他動詞用法と有意差が見られなかった。また、表6で(F)に属する用法は「ことが運ぶ」のみで、自他動詞の割合で見ると自他動詞用法の差がもっとも小さいものである。つまり、(F)用法は数が少なく、自動詞用法の割合も低いということである。このことから、自動詞用法が優位な用法は、自然現象や生理現象を表す場合に集中していると言える。

4.4 調査結果のまとめ

4.2 で見たように、和語の自他両用動詞の他動詞用法が優位なものには以下の三つの用法である。

- (A)慣用句化したもの
- (B)再帰構文や拡張再帰構文であるもの
- (C)動作主他動詞文であるもの

(C)は典型的な他動詞文であるのに対し、(A)(B)は非典型的な他動詞文である。4.1 で述べたように、BCCWJにおける和語の自他両用動詞について、用法の数から見ても、その用例数から見ても、他動詞用法が自動詞用法より多く使われる。その理由は、(A)(B)のような非典型的な他動詞文が多く含まれることにある。特に(A)の慣用句化した用法は、比喩的に使われる用例が多く現れるため、他動詞用法が圧倒的に多い(9割を超える)ということが見られる。

一方、4.3 で見たように、和語の自他両用動詞の自動詞用法が優位なものは以下の三つの用法である。

- (D)自然現象を表すもの

果状態に当てられるという捉え方によるものであり、意志でコントロールできるか否かとは関係がない。そのため、(F)自然に起きる事態は次の例のように、実際に動作主が存在しても自動詞表現を使うのが可能である。

(i)そこで、私の「そげなカネは要らん！」の一喝で事が運んだ。

(E)生理現象を表すもの

(F)自然に起きる事態

自然現象や生理現象、また、自然に起きる事態は日本語では一般的に自動詞文が使われるため、(D)(E)(F)はいずれも典型的な自動詞文である。以上のことから、和語動詞の自他両用という現象は、非典型的な他動詞文が使われることによる結果であると言える。日本語において他動詞構文「XがYをV」が様々な事態と結んでおり、「意図的動作」「被動者の変化」という意味特徴を持たない事態でも他動詞構文で表すことができる。例えば、4.3で見たように、「再帰構文」は他者に対する働きかけがなく、「被動者の変化」という意味特徴を欠いている。また、「状態変化他動詞文」(天野 1987、(38)参照)、「原因他動詞文」「道具他動詞文」(井上 1995、(39)(40)参照)のような他動詞文は、「意図的動作」という意味特徴を持っていない。

(38)私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

(天野 1987: 108)

(39)過度の野心が彼の寿命を縮めた。

(井上 1995: 112)

(40)白い布が机を覆っていた。

(井上 1995: 112)

このような文は、典型的な他動詞文が持つ意味特徴を持たないため、意味的に自動詞文に近い。例えば、天野(1987)は、(38)は自動詞文で表される(41)の意味に近いと指摘している。

(41)私たちは、空襲で家財道具がみんな焼けてしまった。

(天野 1987: 107)

つまり、日本語の他動詞構文は自動詞構文で表しうる事態と結びつくことがあるということである。前に述べたように、仁田(1982)は、再帰構文は「他者への働きかけ」といった意味的特徴をもたないため、自動詞に近づいていると述べている。実際、(B)再帰構文や拡張再帰構文であるものは、他動詞構文「XがYをV」の多くが「XのYがV」という自動詞構文に言い換えられる。例えば、「理沙は目を閉じた」は「理沙の目が閉じた」に言い換えられ、「ファシズムが勢いを増す」は「ファシズムの勢いが増す」に言い換えられる。

airiti

一方、(A)慣用句化したものについて、前に見たように、再帰構文や拡張再帰構文として使われる、或いは「NをV」が自動詞表現に相当する概念を表す。つまり、(A)(B)の用法は、典型的な他動詞文を持つ「意図的動作」「被動者の変化」という特徴の一方や両方を欠き、意味的に自動詞表現に近い。⁷和語動詞の自他両用という現象は、本来自動詞構文で表しうる事態が他動詞構文によって表されることから来るものであると考えられる。

5. 本稿の調査結果と先行研究の記述との関連

この節では本稿の調査結果と先行研究の記述との関連を見る。4.2で見たように、和語の自他両用動詞の他動詞用法が優位なものは以下の三つの用法である。

- (A)慣用句化したもの
- (B)再帰構文や拡張再帰構文であるもの
- (C)動作主他動詞文であるもの

(A)(B)(C)の36個の用法のうち、(B)の用法が22個あり多く占めている。先行研究では和語の自他両用動詞が再帰構文や再帰的構文(拡張再帰構文)で使われることが広く指摘されている。例えば、2節で見たように、須賀(1993)は例(2)で「列車」が「速度」の変化を引き起こせば、「列車」自身の変化になると指摘しているが、(2)はガ格名詞が[-人間][-有生][+具象]という特徴を持ち、一種の拡張再帰構文と言える。また、例えば、森田(1994: 238-239)は(42)のような「自他二様の形式が納まり得る文脈」では、他動詞文が自動詞文に歩み寄り、自他二様の形式が納まり得る文脈で「生える／生やす」のような自他異形のペアの動詞がなかったら、同じ動詞が立ってしまい((43))、これは自他両用動詞を生み出す要因の一つであると述べ

⁷ 典型的な他動詞文を持つ特徴を欠けば意味的に自動詞文に近いかについて、自他動詞(文)を区別せず、他動性という連続的なスケールで捉える Hopper and Thompson (1980) の考え方に従えば、典型的な他動詞文の特徴を欠くものは、必然的に自動詞(文)に近い。

ている。

(42) 鯰はヒゲを生やしている／鯰はヒゲが生えている。

(森田 1994: 239)

(43)a. この干し柿は粉を吹いている／この干し柿は粉が吹いている。

b. 厳しく火を噴く／厳しく火が噴く。 (同上)

「自他二様の形式が納まり得る文脈」について、森田(1994)は詳しく述べていないが、挙げた用例を見ると、(42)のような再帰構文(ガ格名詞が[+人間][+有生][+具象]という属性を持つもの)や(43a)のような拡張再帰構文(ガ格名詞が[-人間][-有生][+具象]という属性を持つもの)である。王(2015、2020)は、和語の自他両用動詞をその格名詞の意味カテゴリーによって四種類に分けその構文的タイプを考察し、他動詞用法の多くは再帰構文や拡張再帰構文であると指摘している。

今回の調査結果からは、先行研究の記述が支持されるように思われる。今回の調査結果から新たに以下のことが明らかとなった。

- ① 他動詞用法が優位なもののうち、慣用句化したものがあり、それらは他動詞用法が 9 割以上を占め、他動詞用法が圧倒的に多い。
- ② 他動詞用法が優位なもののうち、典型的な他動詞文で表されるものもあるが、それらは「閉じる」の用法に集中している(ただし、今回の調査では「開く」を調査対象から外している)。

自他両用動詞が形成される原因について、森田(1994 : 238-239)は「自他二様の形式が納まり得る文脈」では、「他動詞文が自動詞文に歩み寄る」と指摘している。「他動詞文が自動詞文に歩み寄る」という記述を本稿の調査結果から改めて説明すると、次のようになる。4.4 で述べたように、日本語の他動詞構文は自動詞構文で表しうる事態と結びつくことがあり、和語動詞の自他両用という現象は自動詞構文で表しうる事態が他動詞構文によって表されることからくるものであるということである。

6. まとめと今後の課題

冒頭で述べたように、本稿の研究目的は次の(a)(b)である。

- (a)自他動詞用法のどちらが多く見られるか、その理由は何か。
- (b)自動詞用法、他動詞用法が多く見られるものにはそれぞれの
ようなものがあるか、その理由は何か。

本稿の考察を通じて、(a)(b)は次のように解明された。

- (a')他動詞用法が多く見られる。和語の自他両用動詞の他動詞用法に慣用句化したもの、再帰構文や拡張再帰構文が多くあるからである。特に慣用句化したものの他動詞用法が高い割合でBCCWJに出現している。
- (b')表 3~表 5 に示された用法は他動詞用法が優位なものであり、(A)慣用句化したもの、(B)再帰構文や拡張再帰構文であるもの、(C)動作主他動詞文であるものがある。表 6 に示された用法は自動詞用法が優位なものであり、(D)自然現象を表すもの、(E)生理現象を表すもの、(F)自然に起きる事態がある。自動詞用法が優位なものはすべて典型的な自動詞文であるのに対し、他動詞用法が優位なものは(A)(B)のような非典型的な他動詞文が大半を占めている。(A)(B)のような非典型的な他動詞文が自動詞構文で表しうる事態と結びつくことで、和語動詞の自他両用という現象が生じる。

2 節で述べたように、BCCWJでは「開く(ヒラク)」と解析されたもののうち、「開く(開く)」の誤解析と考えられるものが多数あるので、本稿は「開く(ヒラク)」を調査対象から外した。「開く(ヒラク)」の自他動詞用法を調査するのが課題として残されている。また、和語動詞の自他性は語彙的ヴォイスで表されるのに対し、漢語動詞、外来語動詞の自他性は文法的ヴォイスによって表される。この違いが自他両用動詞にどういう形で反映されるかを解明するのが今後の課題としたい。

参考文献

- 天野みどり(1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 pp.110-97
- 井上和子(1995)「他動性と使役構文」『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』平成6年度科学研究補助金(一般研究)研究結果報告書 pp.109-136
- 王淑琴(2015)「和語の自他両用動詞について」『政大日本研究』12 pp.67-98
- 王淑琴(2017)「日本語における再帰構文とその位置付け」『台湾日語教育學報』29 pp.189-218
- 王淑琴(2020)『日本語の自他両用動詞の研究－「自他対応」「自他交替」との関連－』政大出版社
- 田中敏・山際勇一郎(1992)『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語』(改訂版、初版1991)くろしお出版
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 須賀一好(1993)「自他同形の動詞について」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂 pp.321-336
- 須賀一好(2000)「日本語動詞の自他対応における意味と形態との相関」『日英語の自他の交替』ひつじ書房 pp.111-131
- 仁田義雄(1982)「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntaxの姿勢から」、『日本語教育』47 日本語教育学会 pp.79-90
- 宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院
- 森田良行(1987)「自動詞と他動詞」『国文学』6 明治書院 pp.155-180
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 森田良行(2000)「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本語研究』8 早稲田大学国語学会 pp.74-63
- Hopper, P.J. and S.A. Thompson. (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language*, 56, 251-99.

airiti

付記

本稿は『日語自他兩用動詞的自他用法分布與其句構之間的關聯性』
(科技部 108-2410-H-004-051-MY2) の研究成果の一部である。また、
査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心から御礼を
申し上げたい。